



天楽 寺川智人

恋、愛、百、景、

おんあいつやっしーい



TOKENOKO
NOVELS

恋愛百景

第一楽章

寺川智人
発案編著



竹の子書房文庫

※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のもので、作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

カバー写真 悠&よびー

本文写真 寺川智人

※この企画は、ハツミさん@hactsumiが診断メーカーで作成された「恋愛お題ったー」<http://shindanmaker.com/28927>のお題から始まった企画です。恋愛お題ったーで出されたお題から生まれた、百通りの恋愛模様をお楽しみ下さい。

ティファードロップ

寺川智人

雨音に目を覚ました。

空を見上げると重い雨雲が広がっている。

屋根を、地面を、窓硝子を雨粒が叩く。

彼女はまた、この空を見て泣いているのだろうか。

軒先には名も知らぬ鳥が雨宿りしている。

鳥よ、どうか、雨が止んだら彼女に伝えてほしい。

こんな小さな朝の庭にも、土筆つくしが顔を出したよって。

花蜜

寺川智人

人気のない早朝の公園、朝露の残ったベンチに座り、
俯うつむいて泣きじゃくる私の口に、不意に甘い香りが広がる。
びつくりして顔を上げると、そこにあなたがいた。

あなたは新しい花を差し出してくれたけど、私は首を
振り、落とした花弁を拾い上げ、蜜の香りを吸い込む。

この花に、替わりなんてないもの。

遠いききもさす 黒椽

少し呆け始めた祖母が呟いた。

「こんな日だったかねえ……行つてしまわれたのは。随分と待つとつたけど帰つてこんかつたんよ。それでお爺ちゃん、ね……それでも裏切つたことになるのかねえ」
あたしは畳の上で寝そべり、無言で話を聞きながら外を見つめた。

曇天の昼下がりに、また雪が降り始めた。

守護霊交代 逆さ吸血鬼

寒気を感じ振り返った。

誰もいない。深夜のエレベーター、乗っているのは自分だけだから当然である。

二つの足音が後ろ側へ回るのが聞こえた。

ぐるぐると回る足音に合わせて視線を巡らすのが、何も見えない。足音はばらけ重なり、やがてひとつつとなった。「もう大丈夫だよ」

死んだ夫の声が背後から聞こえた。

壊れた時は捨てて 悠

「さよならなら」

彼女は僕にそう言っ
て階段を下りていった。
僕はやり場のない想いを時計に込めて地面に叩きつけた。

最初のデートで買った大切な時計。

ずっと時を刻んでいたけれど、今、時を止めた。

時計は歩道橋の真ん中に置いていった。

思い出も要らない。

時計は月に照らされて綺麗だった。

開始点跡地

こたろー

もう星を映すことのない空を見上げ、月が綺麗ですねとおどけて言うのと、彼女は、私も、と笑った。

大切な場所だし、いつそ、来年からここに住もうと真剣に言うのと、彼女は泣いた。

二人が出会ったプラネタリウムはやがて取り壊され、来年新婚向けの建売住宅地になる。

忍び込んだ廃墟に靴音が二つ瞬くように。

桜狩り もりか

花見の帰り、上機嫌で歩くあいつに無性に腹が立った。

「おい、べたべた触らせてんじゃねえ……」

後ろから肩を掴み、笑いながら逃げようとするのを許さずに夜桜の天蓋の下、あいつを強く抱きしめた。

そのまま項に口づける。

刹那^{せつな}、雷に打たれたようにあいつの身体がすくんだ。

「お仕置きだからなの？」

夕景 有川憂

「雨振りの後、道が光るのはどうして?」

「水がおひさまとお話ししてるから」

彼の答えは、いつもステキ。

「星はどうしてきらきらするの?」

「内緒を話してるから」

夕焼けはどうしてこんなに切ない色なの?

ねえ、答えてよ。

座ったベッドの向かいに、あなたはいない。

私の頬を、オレンジ色の涙が零れた。



冷たい星

端座サト

待ち合わせは夜なのに、もうここに来てしまった。

大勢の人が行き交う橋の上から夕方の街を眺める。

ふと琥珀色の空に輝く星に気付いた。

彼が私を見つけてくれるまであの星を見つめていよう。

手袋をポケットにしまいこんで欄干らんかんに手を置いた。

手を繋いだときに彼がびつくりするくらい冷たくなっ

ているように。

夕方の動物園、さよならを言う、プレゼント

落日のキリン 水崎沙亜乃

西日差す動物園は、人影もまばらだ。

「キリンって首を絡ませて求愛するんだって」

嘘つき。あなたが絡ませたいのは葉の首しおりだ。

親友の葉と私。

私が先に告白し、あなたはそれを了解した。

「これプレゼント」

さつき車の助手席から見つけた、葉のネックレス。

親友と恋人、私は同時に別れを告げた。

朝のこたつ 高田公太

「朝のこたつ」

と意味もなく呟いてしまったせいで、

「それってどういう意味？」

と妻が食ってかかってきた。

意味なんかないんだよなんとなくだよ、と説明してもケンカ腰で問い詰めてくる。

しよすがないから、お前を今も愛しているという意味だと、嘘を教えておいたら魔法が解けたように妻は黙った。

待ちぼうけ 廳眞司朗

昼休み、いつものように公園で彼女を待つ。

広場に立つ時計の針が進むのを眺めながら。

待って、待って、待ち続けて。

もう戻らなければ午後の勤務に遅れてしまう頃、裏切られたような気分で席を立つ。

一昨日、彼女が交通事故で逝ってしまったという事実を、僕はまだ受け止め切れではない。

僕と幽霊と階段で いもけんぴ

嫉妬^{しつと}しちやうな、そう言おうと彼女は手すりに腰掛けた。学校に忍び込んだあの日、僕と彼女は出会い、それからこの階段でよく本について語り合った。本好きな幽霊。だが、もう行かねばならない。

遠くよと言おう彼女の横顔は哀しくも美しかった。彼女の消えた深夜の階段に、僕の啜^{すす}り泣きが響く。

地縛霊 Madrine

じわり汗が滲^{にじ}む晩。彼らは涼みに海辺へやってきた。
少し大胆な気持ちになった女。

「好きにしていいたいのよ?」

男に迫る。すると、

「分かった好きにするよ!」

笑顔で別れを告げ、男は走り去っていった。

それから海辺では「想定外だよ!」という叫び声と、
啜り泣く女の声が聞こえる、という噂。

五分五分 黒実操

早朝のキッチン、誓う、鍵

早朝のキッチン。

結婚祝いに貰った圧力鍋、新品の布巾、床の上に車の鍵、ドアノブにぶら下がる肉塊。

酷いお酒の臭い。

やつと痙攣けいれんが止まったね。長かったな。

あの人と生きていくことを、改めてここに誓う。

「妻に逃げられて自殺した亭主」

という筋書きに、警察が乗ってくれるか、賭ける。

光と影

真佐雪

この街はどんな時間でもきょうせい嬌声や笑い声が光と共に溢れている。

だが雨の日、ビルの狭間を抜けて深夜の階段に辿りつくと、哀しい恋人達が濡れながら、互いの情熱を交わす行為にふけ耽るのが見える。

愛しい温もりを雨に奪われないように。
刹那の愛を流されてしまわないように。

あいつに逃げられた。

颯真司朗

深夜。あいつが逃げていく背中をぼんやりと見送る。

やだなあ、ただの幼馴染だと思ってたのに。

合コンの後、家まで送るよ、って あたしを近道の路地裏に引っ張り込んで。

告白して逃げるとは何事ですか。

ちゃんと送って帰ってよ！ あたしは、照れ隠しに足元のコーヒー缶を蹴り飛ばした。

祈り 寺川智人

「ごめんなさい」

おえつ
嗚咽混じりの声は、夕刻から降り続けている雨にかき消された。

朽ちた洋館のシルエツトが、曇天よりも濃い闇を刻む。女は破壊された玄関に歩み寄ると、その前にそつと献花を置いた。

「いいのか？」

背後から傘を差し出す男に、女は微笑み返す。

二人の前途を祝うように、雨が止んだ。

公衆電話

氷原八魚

間違いなく十年前もここにあった公衆電話だった。
受話器のところに特徴的な傷がある。

この電話からの通話が彼女との最後の会話だった。
もう電話番号は思い出せなかった。

昼の駅ホームで、私は受話器を抱きしめて泣いた。

朝焼けわんこ サデスパー堀野

早朝。

夜勤明けで帰ってくるなり真子は、着替えもせずキッチンに座り込んだ。

忙しい毎日、職場でのトラブル、遠距離恋愛の彼と会えない寂しさ。

いろいろと疲れ果て、ボーっと埃だらけの天井を見つめる。

そこへ携帯が鳴る。

「もしもし」

「わん」

犬のマネでおどける彼が愛おしくて涙が出た。



カップの中の彼女 よぴー

僕は店のマスターである彼女に恋をしていた。

でも想いを伝えるなんてことはしない。

深夜の店内で二人つきりそれだけで幸せだった。

「いつもも来ていただいてありがとうございます。練習中

なんですけど、これサービスです」

猫の描かれたラテアート。

僕はそっとカップの彼女にキスをした。

あいつの誕生日

蒼弥

学校から帰る昼の坂道でふと考えた。

直樹と愛し合うようになって二年。

面と向かってあいつに誕生日おめでどうを伝えたことがないことに……。

「なあ直樹」

俺は自分の前を歩く直樹を呼ぶ。

「何だよ？ 雅人」

直樹が振り返った。

俺は「誕生日おめでとう」その言葉に直樹は笑った。

ソファ 有川憂

オレはずっと、ノラ犬みたいに暮らしてきた。

「ソファで寝る」

落ち着かない暖かな部屋で、そういうオレに彼はいつも黙うたはずつて頷く。

深夜、寂しくて啜り泣くオレに、彼は黙つて寄り添う。

えっちなことも、少しする。

いつかちゃんと伝えられるかな。

オレ、あんたが凄く好きなんだ。

静寂を破る

水崎沙亜乃

「どうして小説の棚に芸術があるのよ、もう」

開館前の図書館。

響くのは本を整理する、私達職員の足音だけ。

芸術の棚へ本を戻す。

彼が好きだ。

叶わない想いはどうやって整理すればいいのだろう。

「僕振られたみたいなんですよ」

いつのまにか、その彼が横にいた。

決めるべきだろうか、今夜。

夕方の路地裏、髪を撫でる、卒業

メルトダウン 真佐雪

空が紅茶色に染まる帰り道、何の前ぶれもなく路地裏に引き込んで抱きしめた。

お前は驚いて身体を強張こわばらせるが、俺は気にも留めず柔らかな髪と顔の輪郭りんかくを撫で、不安そうな顎あごをそつと持ち上げる。

もう我慢なんかしない。

お前の兄貴役はここで卒業だ。

二人ズブ…… 蒼弥

海が見たいと言いい出すから夕方の海辺にやってきた。波間で遊んでる奈津に近付き手を触れれば冷たくて、

「これ着けていなよ」

手袋を嵌めた途端大きな波が押し寄せ二人揃ってびしょ濡れ。

「ふふ。意味がなかったわ」

奈津が楽しそうに笑う。

つられて私も笑った。暫し^{しば}二人で笑い合っていた。

真夜中の起床

黒椽

つきとほしがきらめくおはなばたけのまんなかで、ひ
つじをかうんとしているあなたをみた。

うごくひつじをかぞえきれないみたい。

けれどむちゆうになつてるすがたをみるとあたしも
たのしくおもえた。

……目が覚めるとあなたが隣で眠っていた。

一緒の夢を見てほしくてあたしは羊の数を数え始めた。

秘密に近づきたい 須藤安寿

「お前は待ってるよ」

夜遅く地下室に向かいながら彼は言った。

「やだ、付いてく」

取り残されるのが厭で、彼の秘密を知りたくて、食い下がる。

「好きにするといい」

振り返る彼の眼鏡が鈍く光った。

怒ってる？ 笑ってる？

それとも……誘ってる？

恋の罨

設楽土筆

早朝の病院の廊下で君とすれ違ふ。

白衣姿の君の残り香がふんわりと僕の鼻孔をくすぐる。

後ろ姿を目で追いつつ僕はときめく。

まだ君は僕のことを知らない。

僕が君のことをこうして見つけてしまったことにも。

巧妙に罨を仕掛けていくよ。

これから君とめくるめく恋の螺旋らせんに落ちていこう。

さめる 悠

雨の音で目が覚めた。

何もないこの地下室に閉じ込められて何日目だろう。

着古して色の褪^さめた服は寒い。

室温は氷の様に冷めていく。

僕はここから逃げられない。

「私への気持ち^ちが醒^さめないように」

これは彼女の愛情表現。

麻痺した感覚でそんな風に愛されるのもいいなと思い、

また眠りに就いた。



溺れる

ARM 1475

「昼間っから酒浸りと聞いたが」

呆れ顔の彼は、床に敷いたビニールプールに浸かって
いる彼女の前で溜息を吐いた。

「酒風呂は美容にイイのヨホ」

「違うぞソレ……」

彼は酔っばらってる彼女を抱き起こそうとするが足を
滑らせプールに填はまった。

「今度はあなたに溺れるわー、ひっく」

「……勝手にしろ」

春の音

こたろー

夜通し考え選んだ言葉は朝の波間に溶けて掻き消えた。
申し訳なさそうな君の視線は私を貫いて、きつとずつ
と向こうの誰かを見ているのだと、やっと気付いた。

気にしないで、困らせたかったわけじゃない。
明るく返そうとした声に隠しようのない吐息が混じる。
波音が少し優しくなつて、浜辺の街に春が舞う。

ひとり 那岐

何本目か分からないビールの空き缶を潰し、無造作に放った。

ガランとした部屋に響く耳障りな音に舌打ちする。

あいつが浮気ごときでキレるとは思わなかった。

いつも通り合鍵でのこのこ機嫌を取りに来たらこのザマだ。

それでも完璧に消えてみせたっことは、俺に本気だっただってことだろうか？ なあ。

愛しい人 蒼弥

今日はあの人の誕生日。

私は彼女がいる昼の坂道へと向かう。

いつ愛したのかな？ もうどれだけ愛し合ったかな。

そんな大好きなあの人がいる坂へと向かう。

「由美子」

私は彼女の名前を呼んでみる。

坂で寝てる彼女が起きて私を呼ぶ。

「おいで倅」

私は彼女の傍に駆け寄った。
大好きな人の傍に。

シミュルターー もりか

今日、最後の投影を終えた丸天井は傘の内側を思わせた。
人目を憇しのんで逢瀬を続ける僕達を匿かくつてくれた白い
ドーム。

許されるはずのない星空デートを、かりそめに叶えて
くれた。再開するのは二年後だという。

「暫く来られなくなるね……」

呟いた僕の唇を指先で戒めて、あなたはそつと肩を抱
き寄せた。

深夜の高架下、寄り添う、ゲーム

デデュエット 深川拓

真夜中の高架下、私と彼は黙々と携帯ゲームの通信機能で遊ぶ。

一人で遊んでいた小さな私を心配して、付き合ってくれるようになった。

背中合わせで寄り添い寒さをしのぎ、時間が来たら私を家まで送る。

会話はない。

私のゲーム機には、送れずにいるメールがずっと保存
されたまま残っている。

階段

氷原公魚

朝の階段は通勤客で混雑していた。

ふと、プラネタリウムで星座を見た帰りに、この階段で転びそうになった彼女を思い出した。

華奢きやしやな身体を支えた私に、彼女はお礼だと言って私の頭を撫でた。

支えられていたのは彼女ではなく私だったと気がついたのは、彼女が思い出になった後だった。

ブルーティアーズ 水崎沙亜乃

終電時刻、並木道の陰に隠れるように泣いているウエディングドレス姿の女を見つけた。

酒でも飲んだか、突然絡んでくる。

「ドレスの試着中に破談になるなんて……」

ぼろぼろと大粒の涙を流す、その姿がとても美しく見え思わず手を伸ばした。

「ナンパです。コーヒーでも飲みませんか？」

青い小鳥 須藤安寿

気付いてる？

朝の駅で出会ったたび、僕が君を見つめていることに。

iPhone越しに君を見つめて、十秒。

ただそれだけの、小さなおまじない。

でも青い小鳥が畏にかかると待つ心地だよ。

いつか君は目を上げて僕と見つめ合う。

きっとそのときに新しい恋が始まるだろうから。

春眠

寺川智人

わがままを言っけて開けてもらった早朝の図書室は、私の貸し切り。

好きな本をじっくり探して回り、誰よりも先に借りることができると。選ぶ放題の素敵な空間。

厳選した一冊をカウンターに持っていくと、先生が猫みたいに、突っ伏して寝ていた。

くすぐってみようかな、それとも、隣で一緒に寝ちやおうかな。

冬空

設楽十筆

別れの時間が近くて、夜の遊歩道で二人離れ難くさまよう。

冬空に寒々と星がきらめく。

肩寄せ合って温かみを感じ合うけど、まだ足りない。

彼女の腰を引き寄せて抱き合う。

たどたどしくついでに唇は氷のよう。

絡めた指が冷たい。

いっそ、彼女の手袋になつてあげたい。

あるものの一生 いもけんぴ

夜がきて、私は暗く冷たい石の部屋に横たえられた。

ああ、愛しいジユデイ、やつと君の元へ行けるよ。

君の元で、私はもう一度君に恋をしよう。

そしてまた、君と風薫る野原を駆けるのだ。

そこで見ているお前達よ。

君らは知るまい。

君らが一様に犬と蔑む私達にも、愛は等しいというこ

とを。

共有 竹宵亭煙鳥

仕事終わり、深夜に一人で思い出の遊園地になんて来たら入れなかった。

やっぱりな。

付き合ってたときもこんなことだらけだったけど、ここは珍しく入れた奇跡みたいなのだったのに。

もしかしたら共有できてる思い出なんて、ここだけかもな。

寒い。別れた夜行ったラーメン屋にでも寄って帰ろう。

象 MaDrine

朝の動物園は皆期待でいっぱい。

もちろん私達もそう……。

こんな私達を見て嫉妬する人達だっているに違いない。

「見て、象がいるよ」

そう言って彼のほうを振り返ると私の足を見て、

「なるほど象の様な足だな」

思い切り引っ叩いた。

彼の顔には赤い線。

「お弁当美味しいね」

にっこり笑って言う彼が愛おしい。

庭先で 蒼弥

クッキーの入った袋を片手にあいつを探したけど見当たらなくて、大きな庭に出てみた。

そこは迷路で、それでもあいつに会いたくて、庭を探し回ってようやく見つけた。

夕日に煌きらめく髪を風に揺らめかせ何かを見てた。

「俊」

声をかけるのも躊躇ためらったけど、呼んでみたらすんなり振り返り「おいで」と、呼んでくれた。

分けたい もりか

修学旅行最後の夜、級友達は早々に寝てしまった。

俺と奏は、寝そべったまま一枚残ったクッキーの争奪戦。じゃんけんでは決着が付かず、

「あげる。食べなよ」

そう言った俺の口に、奏は二つに割ったクッキーを押し込んだ。

「分け合おうって、なんか親密な感じするよな」

笑う奏の言葉のほうが、何倍も甘い。

夏の輪郭　こたろー

入道雲が水平線に重なって、私はあのとときの海辺から動けないでいる。

粒子程の後悔が積み重なった砂浜で、彼と、私ではない誰かの足跡が一緒に伸びていくのを涙の満ち引きと一緒に数えていた。

決して見たくなかった感情が顕在化するように、ただ、雲の輪郭が鮮明になったことだけが、夏の到来を告げて。

くすぶる胸

黒椽

日曜の朝に入るお風呂って気持ちがいいよね。

早起きしたならなおさら。

お気に入りの入浴剤も入れたし。

本当に良い気分。

だけどちよつとでも油断すると『日曜日、仕事になっちゃった。ゴメン』のメールを思い出すから、バスタブにもたれて歌をうたった。

あたしの代わりに天井がしずくを落としました。

Lost 那岐

「……もう当分云えないんだねえ」

穏やかな水面を切り裂く朝の光に、男は目を細めた。

俺がどれだけ許してもこの国は彼を裁く。

潮騒の呼吸にすら急かされている気分になって、両手首を差し出した泣き笑いに「待っててやるよ」と言うのが精一杯だった。

自ら手錠をかけ、恋人を遠ざける……なんて嫌な仕事だ。

朝の水族館、頭を撫でる、ラーメン

柔らかな水 端座サト

朝の水族館はとても静か。

巨大な水槽の中を大きな魚がゆったり漂う。

「イルカの頭を撫でられる水族館もあるんだよ」

と話しかけようとすると、彼は少し離れた場所から私を見ていた。

二人の間を薄青い海が縦長に広がる。

やがて私の横に立つと彼はぶつきら棒に「美味しいラーメン食べに行こうか」と呟いた。

橙

水崎沙亜乃

今朝見たテレビの星座占いのラツキープレイスは橋
だったんだぜ？

何故彼女に引っ叩ぱたかれなきやならないんだ。

「足の骨折で入院してるのに、私の誕生日プレゼントな
んかで病院脱走して心配かけないで」

ああ、泣かせちゃった。

松葉杖片手に慌てて買ったピアスが、夕日に照らされ
て光った。

笑わないうづね 黒実操

早朝の映画館での清掃のバイト。

「もったいね」

相棒が椅子の下に見つけたのは、ポップコーンの入った星模様の紙カップと二本のコーラ。多分手付かず。

「ケンカしたのかな」

「お腹痛くなっただんじや？」

初めて二人だけで共有した、小さな出来事。頬が熱い。こんなことくらいで。

スタンバイ・ガール 端座サト

朝のカフェでのお茶が不味い。

昨日の彼とのケンカは関係ない。

私からは絶対に謝らないからね。

丸いパンにかぶりつく。

誰かの指を噛むみたい。

不意にテーブルの上の携帯が震え出し、画面に青い花の動画と一緒に彼の名前と「ごめん」の件名。

うん。

このお茶を飲み干したら、
カフェから走って飛び出そ
う！

夜の屋上、お仕置きをする、チョコレート

苦いきなももの 粟生慧

バレンタインの夜。

彼の住むマンションの屋上で待ち合わせる。

約束を破った彼に、文句を言うために。

約束より遅れてやってきた彼に私は、

「目をつぶって」

と意地悪く言う。

口うるさく文句を言うよりも効果的なチョコレートを、彼の口の中に放り込む。

甘いものが苦手な彼へのお仕置き。

赤い糸

水澤純

「好きだ」と告げたら「私も」と応えてくれた。

だから僕達は恋人同士だと思ったのに、二人で出かけた旅先の深夜の海辺で見たものは、他の誰かに口づける君の姿。

裏切る君を許せなくて、一人で家路へと車を飛ばした。二人の赤い糸は結ばれていなかったのだと思うと、涙が頬を伝い落ちた。

暗中摸索 MaDrine

寂しがるあなたを置いて私は駆け回る。

雲のように、風に流され、時に散り散りになりかけながら。

寂しくさせてごめんなさい。

私は探しているの。

幸せになれる方法を。

答えを。

夕方の図書館にでも行けば、見つかるのかな。

あるわけがないと分かっている場所でも、手探りで探すわ。

だって見えないんだもの。

ココア 有川憂

昨日、アイツと行った遊園地。

白々と朝日に煙る遊園地を見ると、夢だったんじゃないかと思う。

アイツは手品師みたいだ。

タネも仕掛けもない、恋の魔法にかけられたボク。

「おう、おはよ」

ずい、と差し出された鼻腔をくすぐるココアの香りと、照れくさそうなアイツの顔。

それは、
夢でも魔法でもない。



魔法の言葉

寺川智人

朝の日差しが差し込む窓辺で、ジャスミンテイの香りに包まれながら穏やかに過ごす、短いけど大事な時間。

カップの中の液体と同じようなセピア色の店内は、まるで時間が止まっているかのよう。

でも、その魔法も永遠じゃない。

「またね」

マスターが笑顔でそう言う。

はい。また、あなたに会いに来ます。

夕方のキッチンへ

蒼弥

外は雨。傘を差し駅で待ってるあの人を迎えに行く。

「お帰り」

彼にそう笑いかけ一本だけの傘で寄り添いながらアパートに帰ってくる。

「ご飯できてるから待っててね」

私はキッチンに向かう。

「手伝うよ」

彼も手伝ってくれた。

そんな彼にそつと寄り添ってみた。

「甘えん坊」

そう笑われた。

GAME

水崎沙亜乃

最終電車が目の前を通過した。

ホームには私と彼だけの二人だけ。

「傘なんか取りに戻らなきゃ良かったな」

「ごめん、わざとなの。」

「走ったから酔ったかも」

地下鉄の階段でよろけた振りをして、彼の腕にもたれ

掛かる。

誘いの常套句^{じょうとうこうく}。

彼を貪りむさぼりたい欲求だけが頭を支配している。
引つかかってよ。

初恋 有川憂

その人の甘いテノールが囁くささや「よくやった」が欲しくて、必死に試験勉強をした。

そんなこと、何にもならないと知っていたけれど。

真昼の浴室に飛び込んで、制服のままシャワーを浴びる。握り締めた誇らしい点数のテストが、滲にじんで歪む。

「先生、結婚するんだって」

その言葉に、悲しみ深く溺れていく。

夢なん、覚めなんぞ

真佐雪

雨の中、入り口の扉が開くのを待つ。

二人で水族館に一番乗りできたら……昨夜の決心を反芻していると「はぐれるぞ」と手を握られた。

「あの、あのね、私」

「そばに居ろよ」

「あのそうじゃなくて」

「俺以外の男に近付くなよ」

心臓が一瞬止まって、凄い勢いで動き出した。

それって……。

八十一七七 水澤純

ハナモモの甘い香りがする昼の並木道を、愛犬と散歩をする。

毎日同じ時間、後ろから追いついて、そして「こんにちは」と言いながら追い抜いていく軽快な足音。

その素敵なお声と軽やかな足取りに、胸のときめきを抑えられない。

いいよね？ 少しくらい恋しても。

目が見えなくなったらって女の子だから。

Choose Me 那岐

バーボンを頼んだ後で「どっちにします?」と聞かれた。何が、と首を傾げていると、

「またホテルでもいいけど、俺の部屋でも構いませんよ」アルコールの種類を聞くのと同じトーンでそんなことを言う。

カウンターに置いた指が震えた。

喉の奥が熱く感じるのは強い酒のせいか、目の前に立つこの男のせいか。

つよがり もりか

夜勤だという恋人に付き合つて、午前中から眠つた。このところの激務で、今日が何の日か忘れていているようだ。目が覚めると、傍らには愛しい人の姿はすでにない。『どつちが大事?』

なんて無粋なことはいいたくない。だから、

「頑張れ！ 誕生日おめでとう」

伝えそびれた言葉を、メールで送った。

長袖

氷原公魚

君と出会ったのは夕方の廊下。

入学したばかりで大きめのサイズだった長袖シャツは文字どおり袖が長すぎた。

君には笑われたけど、僕はその笑顔が好きになつたんだ。

あれから三年、卒業する僕のシャツの袖は丁度いいよ。
だから今度は笑わないで、僕が告白するのを聞いてくれ。

冷たい頬

水崎沙亜乃

「そのウエット薄いんじゃないか？ 唇紫だぜ」

彼が水筒に入った熱いココアを、そつと差し出してくれる。

「どうしても行くの？」

黙って頷く彼。

本格的にサーフィンをやりたいのは分かった。

「……さよなら？」

「海は世界中繋がってるだろ」

夕日が眩しい海辺。
抱きしめられて泣きたかった。



絆 とよね

彼は都会へ続く軌線に沿って、振り返ることなく歩み去った。

そして海から帰ってきた。

その間の彼の生活を誰も知ってはいなかった。

私が知るものは……膨れ上がった彼のニクタイに寄り添うように打ち上げられていた、古いハイヒールが一組で……それが、私と彼との最後の絆きずなだった。

全て想定の子たち 黒実操

荒れた毛皮と腹を晒す、檻の中の豹。
寝穢い。

この恋も同じ。

弛緩しきつた怠惰な関係は、悪臭さえ放つようだ。

幕引きは無言で。

メールアドレスを変えて着信拒否。

他に教えたものは、全部嘘だ。

逃げるなら今だと決めた。

新しい恋と待ち合わせる、
ここは早朝の動物園。
欲しいのは、夜の野生。

夜明け 黒実操

木を隠すなら森の中と落ち合ったのは、
混雑した朝の駅。
列車に乗り込む寸前、ふと心が騒ぎ、
繋いでいる手を
軽く振る。

簡単に解けた。

何だ、こんなものか。

寂しかったのは、一瞬。

ひるがえ
翻り、逃げる。人の流れに隠れる。

彼はどんな顔をしたのか。

知らなくていい。

私は雲ひとつない青空の元へ。

きつみはどバ」 とよね

君に分かるだろうか。

この夜、一瞬の閃光が全てを消したことを。

町と記憶に刻まれた日々が燃え尽きてしまったことを。

今でも君を、実在するのと同じくらい大切に思っている。

会いに来たよ。

君のポスターの辺りを見つめても、映画館には割れた鏡から見つめ返す、黒こげになって死んだ僕しかいない。

想いは鍵付きボジタフスに よびー

二人揃って仲良く登校。今日もこの場所で想いを言う
てみる。

「ねえ」

「ん？」

「あのね……」

「……」

その瞬間私達の上を電車が通った。

「聞こえなかった。もう一回言って」

「何でもない！ ないしよっ！」

今日もダメだった。

今日も「大好き」の言葉に鍵をかけて私の中に仕舞った。

ぬい好き男子 真佐雪

食後の一服に屋上へ行くと、コワモテと名高い景山女史がうずくまっつて泣いていた。

内心驚いたが、黙って隣に座り煙草に火を点ける。

「これでも口堅いのでご安心を」

「ありがとう」

靴の裏で煙草を消し、少し考えてから女史の髪を二回撫でる。

「あにすんのよ」

……初めて年上が可愛いと思った。



まがじら「うとなき」想い 黒実操

「賽銭さいせん泥棒が出るの」

奴は神社の娘。

寝ずの番をすると譲らないので、俺も付き合おう。

誰にも内緒でお堂の中に籠もり、タオルケットを半分こして、取り留めもない話で時間を潰す。

「来たら起こすから」

俺の言葉に甘え、奴は横になる。

寝息を確認して、そつと繋いだ手は、氷のように冷た

かつた。

お返し 菊地順

「お返し期待してる」

バレンタインにチョコレートを手渡されたとき、そう言われた。

ホワイトデーにクッキーを手渡しながら「お前の好きな夜の遊園地と一緒にいこう」と入場券を取り出した。

見つめ合ったまま「デートの誘いなんだけど？」って続けると、彼は真っ赤になって頷いた。

ロールプレイ とよね

『助けてパーシユ、私はここよ！ 私のそばにいてー！』
……純也は目をみはる。

コンビニの店員が笑顔で返事を待っている。

そうだ。「温めますか」と訊かれたのだ。

何故それをテレビゲームのヒロインの台詞と聞き間違えたか分からない。

純也は答える。

「お願いします」

まだ酔っているのか。

黙り、そののち慌てて答えた純也を訝しがるでもなく、深夜のコンビニ店員は弁当を温める。

自分より少し上くらいの女だ。

おつりをくれる手は皮が剥け、笑う目の下には隈がある。「ありがとうございました」

久しく聞く言葉だ。自分のような奴でも、客である限りとりあえず丁寧に扱われる。

コンビニに背を向けて河川敷をたどる。

聖性から墮した三途の川が、対岸の工場の光を揺らし

ていた。

その河を見下ろすアパートへ純也は帰ってゆく。

カーテンを閉め、明るくなつた部屋で、最初にゲームを起動する。

桜もとうに散つたとはいえ、夜の部屋は寒い。

ゲーム機の排熱がわずかに心を温める。

やがてオーピングムービー。ロードゲーム。

張り詰めた心がほぐれていく。

お気に入りイベント——画面の中で、桃色の髪に大きな瞳を持つヒロインが、炎の中で主人公の青年の元へ

走っていく。

『助けてパーシユ、私はここよ！ 私のそばに居て！』

『アメリカエ！ もうお前を離さない！』

電球の切れかけた古い部屋が、フアンタジーの光に満つ。燃え上がる魔城で抱き合う青年と少女。

見つめていれば、心が安らいだ。

唯一心が安らぐことなら、それがある場所が天国だ。

ユートピア、あるいはエデン。

……大音量の着信音が、幼い楽園を打ち破った。

〈上岡、仕事辞めたんだって？〉

「厳しくやって下さる」

人事課長はわざわざ新人社員達の前で、人材育成会社の社長に言った。

「彼らゆとり世代は競争を否定されて育つてますからね。甘ったれた性根から叩き直してやらんと、何より彼ら自身身の為にならんですよ」

——あつ、辞めると言うのがいたら、辞めさせて構いませんから。

新人社員研修がある、研修はよその企業に外注されていると聞いていたが、その内容までは知らされていないな

かった。

中には酷い所もあると聞いていたが、我が身に降りかかるまでは他人事であつた。

睡眠時間は四時間。休憩は昼食時のみ。深夜すぎまで自己アピールを延々叫ばされる。

会社の理念と社則を短時間で暗記するよう求められ、できなかつたものは床に頭を付けての謝罪を強要される。「初めから辞めさせろつもりなのさ」

もはや名前すら思い出せぬ同期の男が言った。

「少ない人数で求人かけたら、経営がまずいと思われる

だろ。だから多めに採ってから辞めさせるんだよ」

そんなことは純也にだって分かってはいたが、純也にしても、五十七社目でようやく内定を取ったのだ。

しかし乗り越えてやる決意は、いざ課題不達成時の謝罪を怒声で以って求められたとき、あっさりと砕けた。

「これだからゆとりは／甘やかされて育った奴は／近頃の若者は〓プライドだけ高い×クズ」。

その帰り……荷物をまとめ帰る途中、そのことを覚えていない。

アパートに帰ったとき、このゲームを持っていた。

そういえば中古の店で買ったかもしれない。

高校生の頃のゲームだ。懐かしさがこみ上げて、このゲームソフトを中心に、現実感が蘇生していくのを感じた。ゲームは七〇〇円だった。

生まれた時代が二十二年前、それだけで、あの屈辱的な理不尽を甘受しなければならぬのか。

生まれたこと、大人達が用意した教育を受けたこと、それがそんなに悪だったのか。

教育が悪なら、そのことを六歳の頃に理解して、どう
いう教育を受けるかを自分で決めるべきだったと言うつ

もりか。

ゲームの中では黒幕の手下が降臨し、戦闘に突入する。純也はコントローラを握り、キャラクター達を操作する。

——彼らは愛されるために生まれてきた。

操作されるために、操作され、画面の中で出会い、恋をして愛をはぐくむために。そして画面の外の人間からまでも愛されるようにと。

キャラクター、それたちの生まれた理由はある意味貧相ですらあり、単純なものである。

しかし何と彼らは幸せで微笑ましく、祝福された存在

だろう。それを思うと涙さえ出てくる。

酒が欲しい。

もう一件の着信を知らせる携帯を彼は壁のほうへと遠ざけた。酔えるものは切らしていた。

夕方に飲んだビールの缶をあおるが、もはや一しずつすら残っていないなかった。

仕方なく純也は立ち上がる。朝まで我慢できそうになり。コンビニまではずぐ。

夜風を受けて歩きつつ、頭の中にはファンタジー世界の少女と青年と恋。今死んだら、死ぬまでゲームのこと

を考えていたことになる。

さりとして誰がそれを嘲笑い、いや、気にかけてさえするものか。

とりあえず客だから丁寧に接してやる、それと同じく救急隊は、死にかけているから自分を助けようとし、警察は人が死んだからという理由でその場を調べる。

それが、それぞれの役だから。それだけだ。コンビニに着く。

駐車場の自動販売機に五百円玉を食わせる。

冷えたビールを取ったとき、私服の店員が出てきた。

「あ」

店員は、笑った。

「こんばんは。遅いですから、気を付けて帰って下さいね」
彼女は帰っていく。

ただそれだけの言葉、なのに……涙が出るほど嬉しい
気持ちは、どうしてなのだろうか。

水心 有川憂

あの人は毎朝ここを通る。

時々見せる笑顔がとても好き。

いつも、すれ違うだけだけど。

「お前ホント、水族館好きだな」

「うん」

彼が私のいる水槽へ手を伸ばす。

「行ってきます」

ああ、最高の誕生日よ！

彼が私に笑いかけてくれた。

走り出した少年の後ろで、小さな熱帯魚が嬉しそくに
尾^{おびれ}鰭を振った。

なすがまま 蒼弥

昼のグラウンドでサッカーをしていたら急に雷が鳴り始めた。

「ひゃあ」

雷のダメな俺はその場にしゃがみこんだ。

「大丈夫だってほら」

中野に言われ立たされる。

でも俺は雷が苦手なんだよ。

中野は楽しそうに撫でたりして気を紛らわせてくれる。

好きにされてるような気もするけど……。

略奪 おぼろちゃん

朝露に濡れる頬の傷を、僕はそつと撫でた。

彼は一瞬呻いて、目を開ける。

目覚め始めた街の息づかいが、くすんだホテルの裏庭まで届く。

ごめんね、ごめんね。

僕は泣き出した。

彼は破れたコートで僕の頭を包み込み、上からぎゅつと抱きしめてくれる。

「ばかやろう」

彼の囁きに酔う僕は、
ずるい。

ハレルヤ 水崎沙亜乃

「昔、夜の遊園地に忍び込んだことなかつたっけ？」

「あれは咲がりボンを失くしたって泣くから……まず飲もうぜ」

缶ビールを開けて乾杯。

「だって司から貰った奴だったから……」

「ありがとう奥様」

頬を染めた咲に口づけた。

日付けが変わったホテルの一室。

幼馴染の俺達は今日、結婚する。

蜜柑

菊地順

丘を登り切って大きく息をつく。

振り返ると海が見える。

冬だからか昼の海辺も流石に人影はまばら。

「幸せになろう」って一緒になつて。

寄り添うように二人で歩いてきた彼は、目の前のお墓に眠っている。

今年収穫した蜜柑をそつと墓前に備え 「今年も沢山幸せが実ったわ」と報告した。

片付けられないうききせみ

寺川智人

「そろそろ休憩しない？」

猫なで声で頼んでみる。

「もう少しし！」

浴室から予想通りの答え。時計は十二時と十三時の間を格闘中。

彼も浴室でタイルと格闘中。

「お前なあ、ちゃんと掃除しろって言うてるだろ？」

「うるさいなあ」

つい憎まれ口。

ねえ、もし部屋が綺麗でも、あなたは来てくれるの？

ホロスコープ 水崎沙亜乃

昼休み、天文学部の部室。

「これ何だよ」

高橋がくれた弁当を開く。

「梅干で北斗七星って」

「星座弁当で素敵でしょ」

まあ、高橋の指先が絆創膏ばんそうこうだらけだし、ありがたく頂こう。

「美味しくないよね」

「いや、美味しいよ」

白米と梅干オンリーの弁当をかきこむ。

途端に、

「嘘つきー！」

女って難しい。

夜の地下室、密会する、ラーメン

魅力的

菊地順

夜の地下室で、君はいつも微笑みながら待っていた。

密会を重ねるかのようになり、僕は誘われるまま何度も通った。

君も魅力的だったけど……試作品のラーメンの試食はもつと魅力的だったんだ。

星の凶鑑 悠

映画館を出ると、空には冬の星座が瞬またたいていた。

まるで映画の続きのようで、思わず溜息が漏れた。

これからもずっと、こうして二人並んで夜空を見上げることができるとのかな。

そんなことを考えたら涙が溢れそうになって、上を向いたまま彼の手にしがみつく。

その温もりが、小さな不安を溶かしてくれた。

プレザント 菊地順

風を感じて目が覚めた。

朝日が斜めに差し込む早朝の地下室。

とは言っても蔵書のために増築した居心地の良い私の部屋。

視線を感じて振り向くと、彼女が立っていた。

「お誕生日おめでとう。選ばせてあげたかったけどサプライズにしたかったから……」

そう言っただけで隠していた子犬とキスをくれた。

グンズグン MaDrine

大好きな彼に寄り添う。

心も身体も委ねようとしたその瞬間、

「騙だまされるな！ それは犬だ！」

そう言われ、隣を見ると目を潤うるませた大きくて人懐こ

い麻呂まろ眉まゆの黒い犬。

びつくりして目を覚ます。

どうやらお昼に図書室で、二人ともうとうととしてたみ
たい。

幸せそうに眠る彼の顔をじつと見る。

「だま……さされるな」

映画鑑賞 須藤安寿

「何度目かな、この映画」

点けっぱなしのテレビ。

夜のソファで過ごす時間は、やっぱりあいつの文句から始まった。

俺はキスを繰り返して、糸みたいに細い髪を撫でた。

あいつの言葉がとろんと甘くなつていくのを待つ。

犯人も結末も、PART2まで知ってる映画を観るように。ただじつと。

レストランの奥に 悠

「駅前のジヨルナにいるから。遅刻すると怖いから七時に迎えに来て」

卒論の提出期限は今日の正午。

約束の時間。

店内にいる彼を探した。

必死に卒論と格闘している彼は眼鏡をかけていた。

いつもと違う姿に思わず見蕩みとれてしまい、もう暫くそ

の姿を見ていたかった私は離れた席に座った。

大人一枚で 逆さ吸血鬼

見たかった映画の最終上映を見る。

客は僕達しかいない。

女優の美しさに見とれていると、彼女が僕の頬をつねった。

嫉妬したのかい？

彼女がそっぽを向く。

ごめんね。

僕は彼女にキスをした。

甘い蜜の味がする。

劇場が暗転し、僕は彼女と大人の半券一枚を鞆に入れた。
二人だけの秘密、深夜のデート。



朝のレストラン、幸福になる、プレゼント

とあるロジックの早朝 いもけんぴ

レストランの朝は早い。

クリームを大小の硝子の壺に入れ、金ピカに磨いた香水瓶にお酢を注ぐ。

青い瀬戸の壺には先ほど、塩を入れておいた。

後は、諸々の注意書きを書くだけ。

ああ、愛しい親方を早く幸福にしてあげたい。

彼へのプレゼントとなる肝心の食材は、今日こそ来てくれるのかしら。

ワンサイドラブ 水澤純

幼馴染の隼は陸上部のエース。

ベンチから見つめる俺を見て、時々微笑んでくれる。

大会に臨むため、朝のグラウンドを駆ける隼。

額から流れ落ちる汗が朝日に輝くのを見ると、俺の鼓動は一気に加速する。

ふと飴色に日焼けした隼の身体を抱きしめたい衝動に駆られた。

告げることでできない俺の恋。

勢い任せの告白

蒼弥

早朝の遊歩道で散歩してる猫をよく見かける。

後を追いかけてみたい衝動に駆られ付いていけばそこには俺の好きな人。

「あ……あの……好きです」

俺は勢い任せに告白してしまった。

「サンキュー、俺も好きだったよ」

なんて嬉しい言葉が返ってきた。

こんなときは猫に感謝しなきゃな。

冬の通学路

黒椽

手すりにもたれて買ったばかりの缶コーヒーの蓋を開けると香りと湯気が沸き立った。

立っている下は真っ直ぐに伸びた道と行き交う車。

その先にある太陽が眩しくて目を細め、視線をやつて来るであろう方向へと見据えた。

誰もいない。

自然と漏れた溜息を打ち消すようにコーヒーを一口飲んだ。

秋の馨り　こたろー

幾千パターン繰り返した脳内の告白シミュレーション
ゲームは、待ち合わせ場所のドアが開く音で終わった。

空が夜へと滲み始め、放課後の屋上に吹く風には秋が
匂う。

暮れかけ色に染まった彼女の笑みが僕を震わせた。

数瞬後、僕と彼女は笑い合っているだろうか。

今、茫漠とした世界がコマ送りに動き出す。

冬の体温　こたろー

飼い犬の噛み癖が酷いという話をしたら、それ愛情表現のひとつだよ、と彼女は笑った。

思わず漏れた溜息が白く煙る。

瞬間、長袖を引っ張られ、剥き出しの首元に彼女の歯を感じた。

愛情表現。

もう一度言って彼女は廊下を駆け出していく。

彼女の体温を覚えた皮膚が、より冬の寒さを自覚した

ように冷たい。

海辺にて

颯真司朗

深夜、海辺で君と待つ。

沈み行く月が、空と海の境に銀色の線を引き、昇る朝日が明るく燃える光をそれに重ねる。

朝焼けの中で、最高の笑顔の君とファインダー越しに見つめ合ってシャッターを切った。

後日、僕らが婚姻届を出して帰ってくると、写真コンテストの大賞受賞の通知が待っていた。

深夜の水族館、キスをする、湯たんぽ

深海の部屋で

颯真司朗

ライトの明かりが、壁にゆらりと波紋を描く。

水が入っているというそれが映し出す光は、どこことなく深夜の水族館を思わせる。

深海のような静けさの中、彼女の肩を抱き寄せてキスを試みた。

結果、僕の唇は熱くて硬い湯たんぽに迎撃されて今に至る。

もうちよつと違うものでガードしてよ。痛い。

新生活

氷原公魚

早朝の床の上にかけてそばをドンと置いた。

それだけじゃ寂しいので卵を入れて月見そばにする。

「テーブルはないの？」

と彼女は聞いたが、引っ越したばかりで家具はこれから買うんだ。

とりあえず家具屋の開店まで暇だから、君の足の裏で
もくすぐることにしようか。

そうしようか。

午前四時の不眠症

寺川智人

「好きだ」と言ってくれた、あの人の顔が何度も何度も浮かんでは消える。

同じ場面の繰り返し。

真っ直ぐな瞳に映る自分の顔までにはつきり分かるくらいに。

しどろもどろに答えた自分の言葉は、恥ずかしくて忘れちゃったけど。

どうしよう、全然眠れない。

昨日までとは違う一日の始まりが待ってるのにつ！

第一楽章 後書き

寺川智人

時間・場所・言動・キーワードを元に、いろいろな視点で紡がれた恋愛模様、いかがでしたでしょうか？

『恋愛お題ったー』 (<http://shindannemaker.com/28927>) を作成されたハツミ様 (@hactsumi)、素敵なお表紙を撮影して下さいました悠&よぴー様、この企画に作品を寄せて下さった皆様、そしてお読みいただいた皆様に感謝します。『恋愛お題ったー』作者のハツミ様からメッセージをお預かりしておりますので、掲載させていただきます。

「恋愛お題つたーが創作のヒントとなり、素敵なお作品が生まれることを嬉しく思っています。ご利用に感謝します」
皆様に、素敵な瞬間が訪れますように。

恋愛百景 目次

- | | | |
|----|----------|-------|
| 5 | ティアドロップ | 寺川智人 |
| 6 | 花蜜 | 寺川智人 |
| 7 | 遠いきもち | 黒椽 |
| 8 | 守護霊交代 | 逆さ吸血鬼 |
| 9 | 壊れた時は捨てて | 悠 |
| 10 | 開始点跡地 | こたろー |
| 11 | 桜狩り | もりか |
| 12 | 夕景 | 有川憂 |

14 冷たい星

端座サト

15 落日のキリン

水崎沙亜乃

16 朝のこたつ

高田公太

17 待ちぼうけ

颯眞司朗

18 僕と幽霊と階段で

いもけんぴ

19 地縛霊

MaDrine

20 五分五分

黒実操

21 光と影

真佐雪

22 あいつに逃げられた。

颯眞司朗

23 祈り

寺川智人

- 25 公衆電話 氷原公魚
- 26 朝焼けわんこ サデスパール堀野
- 28 カップの中の彼女 よぴー
- 29 あいつの誕生日 蒼弥
- 31 ソファ 有川憂
- 32 静寂を破る 水崎沙亜乃
- 34 メルトダウン 真佐雪
- 35 二人で…… 蒼弥
- 36 真夜中の起床 黒椽
- 37 秘密に近づきたい 須藤安寿

39 恋の罨

設楽土筆

40 さめる

悠

42 溺れる

ARM1475

44 春の音

こたろー

45 ひとり

那岐

46 愛しい人

蒼弥

48 シェルター

もりか

49 デュエット

深川拓

51 階段

氷原公魚

52 ブルー・ティ・アーズ

水崎沙亜乃

53 青い小鳥

須藤安寿

54 春眠

寺川智人

55 冬空

設楽土筆

56 あるモノの一生

いもけんぴ

57 共有

竹宵亭煙鳥

58 象

MaDrine

60 庭先で

蒼弥

61 分けっこ

もりか

62 夏の輪郭

こたろー

63 くすぶる胸

黒椽

64 L O S t

那岐

65 柔らかな水

端座サト

66 橙

水崎沙亜乃

67 笑わないでね

黒実操

68 スタンバイ・ガール

端座サト

70 苦手なもの

栗生慧

72 赤い糸

水澤純

73 暗中模索

MaDrine

75 ココア

有川憂

77 魔法の言葉

寺川智人

- | | | |
|----|-----------|-------|
| 78 | 夕方のキッチンで | 蒼弥 |
| 80 | GAME | 水崎沙亜乃 |
| 82 | 初恋 | 有川憂 |
| 83 | 夢なら覚めないで | 真佐雪 |
| 85 | ハナモモ | 水澤純 |
| 86 | Choose Me | 那岐 |
| 87 | つよがり | もりか |
| 88 | 長袖 | 氷原公魚 |
| 89 | 冷たい頬 | 水崎沙亜乃 |
| 91 | 絆 | とよね |

92	全て想定のうち	黒実操
94	夜明け	黒実操
96	きみはどこ	とよね
97	想いは鍵付きボックスに	よぴー
99	ぬこ好き男子	真佐雪
101	まごうことなき片想い	黒実操
103	お返し	菊地順
104	ロールプレイ	とよね
116	水心	有川憂
118	なすがまま	蒼弥

- 134 映画鑑賞 須藤安寿
- 132 ゲンゲン MaDrine
- 131 プレゼント 菊地順
- 130 星の凶鑑 悠
- 129 魅力的 菊地順
- 127 ホロスコープ 水崎沙亜乃
- 125 片付けられないキモチ 寺川智人
- 124 蜜柑 菊地順
- 122 ハレルヤ 水崎沙亜乃
- 120 略奪 おぼろちゃん

- 135 レンズの奥に 悠
- 136 大人一枚で 逆さ吸血鬼
- 138 とあるコックの早朝 いもけんぴ
- 139 ワンサイドラブ 水澤純
- 140 勢い任せの告白 蒼弥
- 141 冬の通学路 黒椽
- 142 秋の馨り こたろー
- 143 冬の体温 こたろー
- 145 海辺にて 颯真司朗
- 146 深海の部屋で 颯真司朗

148 147

新生活

氷原公魚

午前四時の不眠症

寺川智人

東日本大震災への 義援金のお願い。

2011年3月11日に東日本を襲った
震災の被災者を救援するための義援
金、救援金をお願いしています。

◆日本赤十字による義援金受付

http://www.jrc.or.jp/contribution/l3/Vcms3_00002069.html

■郵便振替（郵便局）

口座記号番号 00140-8-507

■三井住友銀行

銀座支店（普）8047670

■三菱東京UFJ銀行

東京公務部（普）0028706

口座名義 日本赤十字社

もっと 読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、日々ニヨキニヨキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

<http://tknk.wwu.jp/?p=1259>

こちらのページまでご感想をお寄せ下さい。また、

【竹の子書房】恋愛百景 第一楽章 #tknk

に、ご感想を一言添えて ReTweet してくださいませ。RT がたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみを忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあって、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨砕身し、筍書房はウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「BL」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、CI戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字をという配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。



恋愛百景 第一楽章

2011年5月24日

初版発行

2011年6月6日

改訂第五版発行

発案

寺川智人 @senbei_neko

著者

ARM1475/MaDrine/いもけんぴ/おぼろちゃん/こたろー
サデスパー堀野/もりか/よぴー/粟生慧/菊地順/逆さ吸血鬼
高田公太/黒実操/黒椽/寺川智人/深川拓/真佐雪/須藤安寿
水崎沙亜乃/水澤純/設楽土筆/蒼弥/端座サト/竹宵亭煙鳥
那岐/氷原公魚/とよね/悠/有川憂/颯真司朗

出題

恋愛お題ったー (ハツミ @hactsumi)
<http://shindanmaker.com/28927>

監修

加藤一 @azukiglg

カバー

悠&よぴー @yuuandyoppy

装幀

田中真美 @tanakandesu

発行人

加藤一 @azukiglg

発行所

竹の子書房 @takenoko_shobo 

<http://www.takenokoshobo.com/>

製版所

GLG 補完機構

©NoritoTerakawa/Takenoko-Shobo 2011 Assembled in Minami-Nagasaki